乱歩東海随筆

パイロット版

目　次

中学卒業まで　津、名張、亀山、名古屋
父母のこと
七十年前の父の写真
私の履歴書
一頁自伝
私が探偵小説に心酔するに至った経路
私の探偵趣味
涙香心酔
人形
祖母に聞かされた怪談
私は、犯罪者的素質を持っていた
恋と神様
一頁自伝
幻影の城主
私の履歴書
わが青春記
彼

故郷に夏ありき
涙香心酔
国家ごっこ
押川春浪
故郷の味
海草美味
味オンチ
カステーラ・ノスタルジア
こわいもの
ビイ玉
一行随筆
サイクルおしゃれ時代
中学一年の僕
レンズ嗜好症
内気少年の冒険
私の探偵趣味
「幽霊塔」の思い出
涙香心酔
筆だこ
活字との密約
活字と僕と
幻影の城主

人類史的一飛び
乱歩打明け話
旅順海戦館
うつし絵
「人外境」感想
「破天荒」感想
私の読書遍歴
影響を受けた本
わたしの古典
槐多「二少年図」
探偵映画往来
わが青春の映画遍歴
私の十代
涙香心酔
父母のこと

父母のこと

私の父、平井繁男は慶応三年二月三日、三重県津市において、七代、杢右衛門陳就とその後妻和佐とのあいだに生まれた。この私の祖父陳就は、同人自筆の系図帳記事によると、元治元年三月大和（奈良県）の領地の加判奉行を命ぜられ、その地に引き移って、同領内三か所の山陵御修覆御用掛り頭取を勤め、慶応二年、その功により朝廷より白銀五枚拝領している。そして、同年四月に津へ帰って、津加判奉行に転じているが、私の父繁男はその前後に祖母の腹に宿ったのであろう。

慶応は父の生まれた三年で終わって明治になった。その明治二年には、祖父は藤堂家の民政会計主事や内務会計主事などという新しい名称の役を仰せつかっているが、父の直話によると、四、五歳のころ、袴をはいて祖父につれられ御殿で殿様にお言葉を賜ったことがたびたびあるというから、廃藩置県のあとにも、まだ古風な仕来りは残っていたのであろう。

祖父は明治三年に藤堂家の家扶となり、翌四年隠居を願い出て引退している。その四年には父は数え年五歳にすぎなか

六十二歳

1957・8・25

抜粋

初出・底本　わが夢と真実／昭和三十二年八月　東京創元社

加判奉行　加判は公文書に判を加える意で、それだけの権限を有する重職。津藩には伊勢、伊賀両国のほかにも領地があり、陳就は元治元年（一八六四）三月、山城国（京都府）と大和国（奈良県）の領地を担当する城和加判奉行を拝命した。奉行所は大和の古市（奈良市古市町）にあった。

藤堂家　慶長十三年（一六〇八）から明治四年（一八七一）の廃藩置県まで十二代にわたって津藩を治めた。藩祖の高虎は近江国（滋賀県）に生まれ、豊臣秀吉に仕えたあと徳川家康に重用された。

った。

祖父の正妻は藤堂家の息女で、文久三年に沒している。私の祖母は京都の寺侍の本間氏の娘で、祖父が大和奉行在勤中に娶られたものだが、殿様の息女のあとを襲うことを遠慮して、当時の仕来りとして妾と名づけられていた。しかし事実は後妻なのである。そういうわけで、父には正妻の腹の兄や姉がたくさんあった。その長男は平井陳常というもので、八代目をついだが、その陳常の孫が平井進といって、今も津市に在住し、これが私の本家なのである。

その八代陳常の弟に一人のアブレものがあり、隠居している祖父や実兄の家から金品を持ち出して蕩尽したようなこともあって、祖父は財産を失い、父は藤堂家御出入りの豪商の家に預けられて成人した。祖父が沒したのは明治十七年、父の数え年十八歳のときである。それからは祖母と母一人子一人の暮らしとなった。父には一人の弟があったが、これは津市の商家に養子にやられていた。

父は津市の塾のようなところで初等教育を受けたのだと思うが、向学のこころざし強く、苦学を覚悟して、当時大阪に創立された関西法律学校（今の関西大学の前身）に入った。父に去られた祖母は、津市の藤堂家のお寺の食客となり、父の成業を待ったのである。

関西法律学校の三年余の課程を経て卒業したのは明治二十

殿様　陳就は天保五年（一八三四）、家督を相続し、十一代藩主・高猷に仕えた。高猷は文政八年（一八五）、前年死去した父の跡を継ぎ、明治四年（七一）まで藩主を務めた。

祖父　文化七年（一八一〇）生まれ。明治十七年（一八八四）一月二十三日死去。津の浄明院に葬る。

正妻　高允の娘、法号・静妹院。文久三年（一八六三）一月二十九日死去。浄明院に葬る。高允は十代藩主・高兌の弟。

祖母　天保十一年（一八四〇）七月十日生まれ。明治四十四年（一九一一）七月十四日死去。浄明院に葬る。

関西法律学校　明治十九年（一八八六）十一月、大阪西区京町堀の願宗寺で開校し、同三十八年（一九〇五）、関西大学に改称した。本部は大阪府吹田市にある。

二年の夏であった。第一回の卒業生である。一昨昭和三十年に、関西大学は七十周年の祝典を催したが、そのとき出版せられた「関西大学七十年小史」という写真版の多い冊子には、同大学第一回卒業生の記念写真がのっていて、その十一人の卒業生の中に私の父、平井繁男も並んでいる。

父は大学を卒業しても国に帰らず、勉強をつづけた。学校の助手のようなことをやっていたのかもしれない。また、原稿も書いただろうし、政談演説もやったようである。父は私と違って五尺そこそこの小男であったが、からだに似ぬ声量があり、なかなかの雄弁家だったらしい。

しかし、一人で国に待っている祖母は、父が卒業しても帰ってこないので、淋しさから癪をおぼえ、絶えずその発作がおこるようになったので、父は仕方なく学業を抛って、就職をして祖母と同居する決心をし、同じ三重県の名張町（今は名張市）にあった名賀郡の書記を拝命した。それは卒業後三年を経た明治二十五年のことであったと思う。そして、翌二十六年には妻をめとっている。これも祖母の懇請によったものであろう。

母は津市在住の同じ藤堂藩士の本堂家から迎えられた。藩士といっても、千石取りの私の祖父に比べては微禄の家であったが、母は娘時代に行儀見習いのために、津に近い一身田の本願寺の小間遣いを勤めていた。一身田のお寺は格式が高

記念写真　関西大学公式サイトの「年史編纂室」には「第1回卒業証書授与式（明治22年9月16日）」の写真が掲載されている。http://www.kansai-u.ac.jp/nenshi/history/detail.php?cd=398&nm=1

名張町　名張町新町に明治二十八年（一八九五）六月まで居住。

今は　底本「今日」を改めた。

名賀郡　当時は名張郡。明治二十九年（一八九六）、名張郡と伊賀郡が合併して名賀郡が発足した。郡役所は同二十七年、名張町の鍛冶町から丸之内に移転。

一身田の本願寺　真宗高田派本山、専修寺（津市一身田町）。

く、法主には代々皇族を迎えたもので、その夫人を「お裏さん」と呼び、母はそのお裏さん付きの小間遣いであった。

お裏さんも名家から嫁したもので、藤堂家の息女なども、たびたびお裏さんに坐っていると思うが、藤堂家の歴史『宗国史』によると、前項「祖先発見記」にしるした平井の祖、於光の項に、「伊豆国平井徳右衛門信友女、母杉本氏也、仕于大通公（高次）、生大享公（高睦）及一身田夫人」とあるから、平井の血統からも一身田ゆかりの人が出ているわけで、偶然にも、母の経歴にはそういう関連があったのである。

父母の結婚の仲人は津の親戚のもので、写真の見合いをしたという。まだ写真のめずらしいころで、母と母方の祖母は、父の写真の顔に点々として修正のあとがついているのを見て、この人はアバタがあるのではないかと心配したという一つ話もある。

もうあのへんにも汽車は通じていたが、津から名張町へは汽車がなく、母方の祖母は母をつれて山越えをして、歩いたり、馬にのったりして、婚家へついたという。明治二十六年、父は数え年二十七歳、母は十七歳であった。母の名は「きく」である。

その翌明治二十七年十月、私が生まれた。場所は前項「ふるさと発見記」に詳しい。

宗国史　津藩の藩政記録。城代家老の藤堂高文が編纂し、序は宝暦元年（一七五一）。昭和五十四年（一九七九）、五十六年に上野市古文献刊行会が上下二巻本を刊行。於光は『宗国史外篇』の「外家伝上」に「嬖人平井氏」として記録されている。嬖人は主君のお気に入りの意。乱歩による引用の一部を読み下すと「大通公につかえ、大享公および一身田夫人をなす」。

結婚　挙式は明治二十六年（一八九三）七月二十五日。

汽車　明治二十二年（一八八九）、関西鉄道の三雲（滋賀県湖南市）・柘植（三重県伊賀市）間が開業。

母　明治十一年（一八七八）九月五日生まれ。

私　明治二十七年（一八九四）十月二十一日生まれ。本名・太郎。

七十年前の父の写真

六十二歳

1957・4
抜粋

関西法律学校の創立は明治十九年、第一回卒業生を出したのが明治二十二年、今からちょうど七十年前である。それから父が三重県名張町（今の名張市）の郡役所に就職したのが、私の生まれる前年、明治二十六年だから、卒業から四年ほどは、関西法律学校に残って勉強していたらしく思われる。法律学者になるつもりだったか、あるいは高文とか弁護士試験とかを受けるつもりであったか、よくわからないが、ともかく学校にとどまっていたらしいのである。

それをあきらめて就職しなければならなかったのは、母一人子一人の母（私からいえば祖母）が一人住居の淋しさに、ひどい癪を起こして、父に家庭を持つことを強要したからだということを、私は私の母から聞いている。そこで父は学問を捨てて郡書記となり、母を安心させ、母の希望に従って、同じ三重県津市から私の母をめとったのであった。そして、私はその名張町で、明治二十七年十月に生まれている。

初出　きょうと　第七号／昭和三十二年四月　きょうと発行所
底本　うつし世は夢／昭和六十二年九月　講談社

高文　高等文官試験。

私の履歴書

私の先祖は伊勢の藤堂家につかえたのだから、代々三重県津市に住み、私の父平井繁男もそこで生まれたが、兄に道楽者があって、祖父の没後、家産を失い、父は苦学して大阪の関西大学法学部を出た。第一回の卒業生である。

卒業の数年後、大阪の駸々堂から八百ページの大著『日本商法詳解』という本を著している。はじめ三重県名張町（今は市になっている）にある名賀郡役所に勤め、同県亀山に転じ、のちに名古屋市に出て、東海紡織同盟会の書記長、名古屋商業会議所嘱託、同市の財閥奥田正香商店の支配人となったが、明治三十年代の末から自立して、輸入諸機械販売、石炭販売の店をひらき、店員十数名を置いて一時ははなはだ盛んであったけれども、明治四十五年に早くも破産し、朝鮮馬山に渡って土地開墾の事業をはじめ、その後内地に帰っていろいろの仕事をしたが、大正十四年、かぞえ年五十九歳で没したときには、大阪の綿布問屋の名目重役であった。

父は最初に勤めた三重県名張町の郡役所書記時代に母をめとり、明治二十七年、私はそこで生まれた。名古屋市に移っ

六十一歳

1956・5・3
◇
1956・5・10
抜粋

初出　日本経済新聞　五月三日号－十日号／昭和三十一年　全六回　日本経済新聞社

底本　江戸川乱歩ワンダーランド／中島河太郎編　平成元年九月　沖積舎

亀山　鈴鹿郡亀山町。明治二十八年（一八九五）六月から十月まで「市之坂」（現・亀山市市ケ坂町）、十月から同三十年春まで「権現社ノソバ」（不詳）に居住。

奥田正香　名古屋の経済界をリードした実業家。弘化四年（一八四七）、尾張国生まれ。名古屋商業会議所会頭などを務めた。大正十年（一九二一）死去。

馬山　慶尚南道の港湾都市。現・昌原市の一部。

たのが私のかぞえ年四歳のとき、父が破産したのが私のかぞえ年十九歳、中学を卒業した年であった。それまでは何不自由のない豊かな暮らしであったし、祖母も健在だったので、幼時はお婆さん子として、甘やかされて育った、気の弱い内弁慶の子供であった。

父　大正十四年（一九二五）九月十日、大阪市外守口町（現・大阪府守口市）で死去。津市の浄明院に葬る。

一頁自伝

三十六歳

1930・11・1

抜粋

高台に町があった。そこの石の鳥居のお宮さんに、祖母と遊んでいると、下の方からピイッと笛の音がして、おもちゃみたいな汽車がゴーッと走って行った、それがこの世で最初の記憶。二歳、伊勢の国亀山町在住の頃である。

初出　モダン日本　十一月号／昭和五年　文藝春秋社

底本　わが夢と真実／昭和三十二年八月　東京創元社

汽車　明治二十三年（一八九〇）、関西鉄道の柘植（三重県伊賀市）・四日市（三重県四日市市）間が開通し、亀山駅（三重県亀山市）が開業。

私が探偵小説に心酔するに至った経路

五十四歳

1949・夏

抜粋

私の探偵趣味は「絵探し」からはじまる。五、六才の頃、名古屋の私の家に、母の弟の二十にもならぬ若い小父（おじ）さんが同居していて、その人が毎晩、私のために石盤に絵を描いて見せてくれるのだが、小父さんは好んで「絵探し」の絵を描き、私にその謎をとかせたものである。枯れ枝などが交錯しているのを、じっと眺めていると、そこに大きな人の顔が隠れていたりする。この秘密の発見が、私をギョッとさせ、同時に狂喜せしめた。その感じは、後年ドイルや、ことにチェスタトンを読んだ時の驚きと喜びに、どこか似たところがあった。少年の頃「絵探し」を愛した人は多いであろうが、私はおそらく人一倍それに夢中になったのだと思う。問答による謎々や、組み合わせ絵（ジッグソウ）や、迷路の図を鉛筆で辿（たど）る遊びや、後年のクロスワードなどよりも、私にはこの「絵探し」が、何気なき風景画の中から、ボーッと浮かび上がって来る巨人の顔の魅力が、最も恐ろしく、面白かった。

初出・底本　探偵小説四十年（上）／平成十八年一月　光文社　＊新保博久「解題」に収録。昭和二十四年夏、連載「探偵小説三十年」の冒頭として執筆された草稿

五、六歳の頃　数え年五、六歳は明治三十一年（一八九八）から翌年。

小父さん　明治三十年（一八九七）春から同年末または翌三十一年初めまで住んだ家とそのあと三十一年末まで住んだ家に母の弟・本堂三木三が住んでいた。乱歩は満二歳から四歳。

石盤　底本「石磐」を改めた。

私の探偵趣味

血というものは争われないもので、私の母親が大の探偵小説好きだったことは、いささか面白い。私の五、六歳の頃、父親が勤め人で、留守中はひまだものだから、祖母はお家騒動か何かの、母親は涙香物の、貸本を借りて来て、こたつにあたりながら読んでいたのを覚えている。

私はそばに寝ころんで、よくその話を聞いたものだ。そういうふうにして探偵趣味者に養成されているあいだに、小学校に入り、確か三年に進んだ時であった。学芸会というものがあって、私は生徒や父兄の前でお話をさせられることになった。ちょうどその時分家で大阪毎日新聞を取っていて、そこに菊池幽芳氏訳の「秘中の秘」という探偵小説が連載されているのを、毎日母親に読んで聞かせて貰っていたのだが、私はそれを学芸会で話したものだ。先生は一向ほめてくれなかったように覚えている。その後にも、似たようなことが数回あった。

三十一歳

1926・6・1

抜粋

初出　大衆文芸　六月号／大正十五年　二十一日会

底本　悪人志願／昭和六十三年十一月　講談社

涙香　黒岩涙香。探偵小説家、翻訳家、ジャーナリスト。文久二年（一八六二）、土佐国生まれ。西洋作品の翻案を多く手がけた。大正九年（一九二〇）死去。

菊池幽芳　小説家、新聞記者。明治三年（一八七〇）、常陸国生まれ。「秘中の秘」は明治三十五年（一九〇二）十一月から翌年三月まで連載。昭和二十二年（四七）死去。

涙香心酔

明治三十二、三年のころ（私は六、七歳であった。生まれたのは明治二十七年十月、三重県名張町。本籍は同県津市にある）。父は名古屋商業会議所の法律の方の嘱託（しょくたく）として毎日通勤していたが、やはり宴会などが多かったのであろう、父の留守の秋の夜長を、祖母と母とが、針仕事にも飽きて、茶の間の石油ランプの下で、てんでに小説本を読んでいるようなことがよくあった。そのころは貸本屋の全盛時代で、祖母はそこから借り出してきた講談本のお家騒動か何かを、母は涙香（るいこう）の探偵ものを好んで読んだ（私は母の十八歳のときに生まれたので、そのころ母はまだ二十三、四歳であった）。私は二人が読書しているそばに寝ころがって、涙香本の、あの怖いような挿絵をのぞいたり、その絵の簡単な説明を聞かせてもらったりしたものである。しかし、そのころの私には、まだ探偵小説の面白味などはわからなかった。母も幼い私に探偵ものの筋を聞かせてくれたわけではない。

五十四歳

1949・10・1
抜粋

初出　新青年　十月号／昭和二十四年　博友社　＊連載「探偵小説三十年」第一回
底本　探偵小説四十年／昭和三十六年七月　桃源社

人形

三十六歳

1931・1・14
◇
1931・1・19
抜粋

私は幼い時分、ことさら人形を愛玩した記憶はない。人形について初めてある関心を持ったのは、母からか祖母からか、おそらくは草双子ででも読んだのであろうか、ある怪異な物語を聞かされてからであった。

ある大家のお姫様の寝室で、夜ごとにボソボソと人の話し声がする。ふとそれを聞き付けた乳母が、怪しんで、唐紙の外から立ち聞きしているとも知らず、中の話し声はなんなんとして続くのだ。

相手はまさしく若い男の声、ささやくのは恋の睦言である。いやそればかりではない。二人はどうやら一つしとねに枕を並べている気配だ。

乳母が翌朝、そのことを告げると、「マア、あの内気な娘が」と親御達の驚きは一方でない。どこの男か知らぬが、娘を盗む大それた奴、今夜こそ目にもの見せてくれると、父君はおっとり刀で、時刻を計って娘の寝室へ忍び寄り、耳をすますと、案の定男女の甘いささやき声。やにわに唐紙を開いて飛び込んでみると……

初出　東京朝日新聞　一月十四日号‐十九日号／昭和六年　全五回　朝日新聞社
底本　鬼の言葉／昭和六十三年十月　講談社

これはまあ、どうしたことだ。姫が枕を並べて、寝物語を交わしていたのは、生きた人間ではなくて、日頃姫の愛蔵する、紫の振袖なまめかしい、若衆姿の人形であった。人形のせりふは、おそらく姫みずからしゃべっていたのであろうが。私の祖母（？）は、「でもね、古い人形には、魂のこもるということがあるからね」と聞かせてくれた。

六、七歳の時分に聞いたこの怖い美しい話が、その後ずっと私の心にこびりついて、今でも忘れられぬ。私はかつて、「人でなしの恋」という小説を書いて、この幼時の夢を読者に語ったことがある。

祖母に聞かされた怪談

六十五歳

1960・8・?

全文

私は数年前、西洋の怪談小説をたくさん読んで、「怪談入門」という随筆を書いたことがある。このとき、中国や日本の古い怪談書もいくらか読みくらべてみた。古典的な日本の怪談小説は、多くは中国伝来のもののようだが、日本各地の民話の中に、自然に生まれてきた純日本式の怪談も、ひじょうに多いにちがいない。

私の幼時、おばあさんから、サルカニ合戦やカチカチ山といっしょに、よく聞かされた怖い話があった。まっくらな夜、だれも通らない淋しい場所を歩いていると、目も口もない、のっぺらぼうのお化けに出会ったので、キャーッといって、一目散に逃げだした。そして、暗い道を走って行くと、むこうから一人の人間がやってきたので、やれうれしやと、その人に助けを求め、いまおそろしいお化けに追っかけられたと告げると、その人は、「その化けものは、こんな顔をしていたか」と、ヌーッと顔を前にだした。それが目も口もない、のっぺらぼうの顔だったという話である。

私は、このお化けの二重攻撃がひじょうに怖くて、強く記

初出　図説日本民俗学全集　月報／昭和三十五年八月　あかね書房
底本　うつし世は夢　昭和六十二年九月　講談社

憶に残った。そして、これは日本あるいは東洋独特の怪談だろうと思っていたところ、数年前、イギリスの探偵小説を読んでいて、同じ話がイギリスの民話としても存在することを知って、ちょっとおどろいたのである。それは、エリザベス・フェーラーという女流作家の、「私は見たと蠅はいう」という長編で、その後、早川ミステリーで邦訳も出ている。主人公の女性が幼時聞かされた怪談として、私の幼時に聞いたのとそっくりの話が出てくるのである。

もう一つ、これも子どものころおばあさんから聞かされた話に「人面疽」というのがある。膝や肘に、人間の顔とよく似た腫れ物ができて、その腫れ物の口が物をたべるという怪談である。この話の、本にのっている古いものでは、中国唐代の「酉陽雑俎」で、その話が日本に伝わったものだから、東洋独特の怪談と考えていたのだが、アメリカのエドワード・L・ホワイトという作家のLukundoo（妖術というアフリカ語）という短編に、人面疽の話が出てきたのでびっくりした。中国や日本の話を伝え聞いたのではなくて、まったくの創作らしい。あるいはアフリカなどに、そういう民話があるのかもしれない。

アフリカ探検家が、からだじゅうに、人間の顔をした腫れ物ができて悩む話で、その探検家は、腫れ物が大きくなると、かたっぱしから剃刀で切りとるのだが、いくら切っても、つ

エリザベス・フェーラー Elizabeth Ferrars（一九〇七―一九九五）。「私は見たと蠅はいう」は原題「I, Said The Fly」、一九四五年刊。

酉陽雑俎 段成式（？―八六三）著、八六〇年ごろ成立。

エドワード・L・ホワイト Edward Lucas White（一八六六―一九三四）。「Lukundoo and Other Stories」は一九二七年刊。

ぎからつぎと腫れ物ができ、その腫れ物が小さな口で物をいうのである。

こういうふうに、東西の怪談の似たものをさがしだして、戸籍しらべをするとおもしろいと思うが、私の読んだ範囲では、西洋と東洋の多くは、まるで性質がちがっていて、そういう比較をこころみるのは困難であった。

私は、犯罪者的素質を持っていた

六十三歳

1958・7・1
抜粋

幼年のころ家庭の何かを盗んだことがある。誰にもあることだと思う。ほしいものを手に入れたいというのはきわめて自然な欲望だからである。これが罪だということがわかってくると、盗んだら結局損だという理解から、盗みをしなくなる。

初出　更生保護　七月号／昭和三十三年　日本更生保護協会
底本　うつし世は夢／昭和六十二年九月

恋と神様

三十二歳

1926・12・1
全文

小学の一、二年の頃だと思う。いやに淋しい子供で、夕暮れの路地などを、滅入るように暗くなって行く不思議な色の空を眺めながら、目に涙を浮かべ、芝居の声色めいて、お伽噺のような、詩のような、わけのわからぬ独りごとをつぶやきつぶやき、歩いていたりした。

不思議なことに、夜一人で寝ていて、猿股をはかない両腿が、スベスベとすれ合う、あの物懐かしい感じが、この世のはかなさ味気なさを連想させた。

八歳の私には、腿のすれ合う感じと厭世とは同じ事柄のように思われた。たった一人ぼっちの気持ちだった。命のはかなさ、死の不思議さなどが、ごく抽象的な色合いで私の頭を支配した。

妙なことに、それはほとんど夜中に限られていた。昼間は近所の子供達と、普通の遊戯に耽った。

そんな心持ちからか、私はその時分、私自身の神様を祭っていた。私の所有に属する古い小箪笥があって、それの開き戸になった中へ、ちょうど仏壇のような装飾をほどこし、そ

初出　苦楽　十二月号／大正十五年　プラトン社
底本　わが夢と真実／昭和三十二年八月　東京創元社

こへ何かしら書いたものを、もったいらしく白紙に包んで祭ったのだ。そして、時々そこを開いて、心のうちで礼拝しながら、これさえあれば大丈夫だと思っていた。

この神様が守って下さるから一人ぼっちでも怖くはないのだ。この神様がお友達だから他の子供にいじめられても、ちっとも淋しくはないのだ、と固く信じていた（断っておきますが、当時私には祖母も父も母も健在で、兄弟もあり、召し使いもあり、家庭はごく暖かだったのです）。

だが、私の八歳の厭世は、おかしいことに、恋というものに、しっくりと結びついていた。性的な懐かしさが、この世の淋しさと、ほとんど同じものに感じられた。むろん肉体的な色情を解したわけではないけれど、八歳の子供にだって、恋というものはわかっていた。

しかし、私の恋は夜、蒲団（ふとん）の中で、腿をすり合わせながらふと涙ぐましくなるような、それゆえに、厭世と隣り合わせのごく淋しい、抽象的なものに過ぎないのであった。よく、ほがらかな秋の夕暮れなどに感じる、胸の中がスーッと空っぽになるような心持ち、あの心持ちが、私に神様をこさえさせ、同時にまた恋を思わせたのである。

そのような時に、私は生まれて初めての恋人を発見した。

その相手は同じ小学校の、二年ばかり上の級の女生徒で、自分にとっては、何だか姉さんといった感じのする娘だった。

おそらく学校中での美人で、家柄もよく、成績もむろん優等で、級長なんか勤めていた。

その娘を、遠くの方から、チラリチラリと眺めては、胸の痛くなる思いをしていた。長く見つめている勇気すらなかった。

何かこう自分とはまるで人種が違うようで、娘が友達と物をいったり、お手玉をしたりしているのを見ると、そんな普通の行いをするのが、かえって不思議なように思われた。

一人で道を歩いている時、夜中に床の中でふと目醒めた時などに、私は必ずその娘の姿を幻に描いた。そして、やるせない思いにわれとわが胸を抱き締めたりした。私はさまざまの妄想を描いた（いうまでもなく純粋にプラトニックな）。中におかしいのは、私の家がどうかして、引っ越しをして、そのあとへ彼女の家が移って来るかもしれないという妄想だった。

私は人目につかぬような、部屋の隅っこの柱などへ、片仮名で、奇妙な恋文を認めた。それはもし彼女が私の家へ移って来たならば、彼女にだけわかるような、簡単な落書きだった。あなたのためになら、私は喜んで死にます。というようなことを書いた。考えてみると、私は当時から妙に秘密がかった傾向を持っていた。

やがて、私は思いに堪えがたくなって、数日のあいだ考え

に考えたことを、私としては非常な決心で、断行した。私はある朝、学校へ行く時、一枚の清浄な白紙を小さく正方形に切って、手帳のあいだにはさんでおいた。

彼女の級も私の級も同じ入口から教場へはいるのだ。入口の両側には細かく区切った下駄箱が、ズッと並んでいた。彼女達のは右側、私達のは左側に。いつのまにか、私は彼女の赤い鼻緒の駒下駄を見覚えていた。

教場へ出入りのたびごとに、その穿きふるしの下駄が、何か非常に美しい花のような感じで、私の目を惹きつけるのだ。

さて放課時間の終わりに、私はまるでスリででもあるように、用心深くあたりを見廻しながら、す早く彼女の下駄箱に近づいて、用意していた白紙を、その赤い鼻緒のあいだへさし入れた。そして次の一時間の授業の終わるのを、どんなに待ち遠しく思ったか。鐘が鳴って礼がすむと、飛ぶように下駄箱のところへ来た。幸い彼女はまだ教室にいると見えて、赤い鼻緒は元のままだった。早鐘のような動悸をじっとこらえて、私はさい前の白紙を取ると、ふところの手帳の中へしまい込んだ。

こうして私は、彼女の霊を盗んだつもりだった。

家へ帰ると、誰もいない時を見はからって、手帳からその紙切れをうやうやしく取り出して、長いあいだ眺めていた。そこからは霊妙な香気さえ感じられた。やがて、私はそれを

一枚の半紙の中へ、丁寧に畳み込み、例の私の神棚へ祭った。
それ以来、彼女は常に私のそばにあった。その紙切れは私の守り神であった。ふと淋しくなると、私は小箪笥のひらきをあけて、神にぬかずくように彼女の霊を拝した。そして、少なからぬ満足を覚えていた。一人ぼっちも、闇の夜も、私はもう淋しくも怖くもなかった。
これが私の八歳の恋物語です。
はるかに当時を回顧すれば、あまりにも人間くさくなった今の私が、妙にけがらわしく、恥ずかしく感じられます。

一頁自伝

おやじのチョッキを着て、サーベルをさげて、友達一人なく、独りぼっちで威張っているうちに、学齢が来た。名古屋市白川尋常小学校である。それから、大根畑の熱田(あつた)中学第一回卒業生である。かけ足がゾッとするほどいや。器械体操のかいもくできない弱虫、そのうえ内気者のにやけ少年。強い奴にいじめられるために生まれて来たような男。で、学校は半分くらい病気欠席。

三十六歳

1930・11・1

抜粋

初出　モダン日本　十一月号／昭和五年　文藝春秋社

底本　わが夢と真実／昭和三十二年八月　東京創元社

白川尋常小学校　明治五年（一八七二）、名古屋第十三義校として開校。同二十六年（九三）に白川尋常小学校となった。現・市立栄小学校の前身校のひとつ。入学は明治三十四年（一九〇一）四月。

熱田中学　明治四十年（一九〇七）、愛知県立第五中学校として開校。大正十一年（一二二）、愛知県熱田中学校に改称。現・県立瑞陵高校の前身校のひとつ。入学は明治四十年四月。

幻影の城主

少年時代の私は、薄情にされたりぶあいそうにされたりすることに人一倍敏感なくせに、お能の面のように無表情な、お人好しな顔をして、内心はげしい現実嫌悪をいだいている少年であった。

夜暗い町を歩きながら、私は長いひとりごとをしゃべるくせがあった。そのころ、小波山人（さざなみさんじん）の「世界おとぎ話」の本の世界に私は住んでいたのである。遠いむかしの異国の世界は、昼間の遊びよりも、ぐっと真に迫って好奇に満ちた私の現実であった。

想像の国のできごとについて、その国のさまざまの人物の声色（こわいろ）をまぜて、私はひとりごとをしゃべっていたのである。

社交術でも腕力でも、弱者であった少年は、地上の城主になることをあきらめ幻影の国に一城を築き、その城主になろうとしたわけだ。町内のどんな腕白小僧も、この幻影の城を攻め滅ぼすすべはなかった。

六十五歳

1960・7・1

抜粋

初出　中学コース　七月号／昭和三十五年　学習研究社

底本　うつし世は夢／昭和六十二年九月　講談社

小波　巌谷小波（いわや）。児童文学作家。明治三年（一八七〇）、東京府生まれ。『世界お伽噺（とぎばなし）』は明治三十二年（九九）から同四十一年（一九〇八）にかけて百巻を刊行。山人は号の下に添える語。昭和八年（一三三）死去。

私の履歴書

六十一歳

1956・5・3
◇
1956・5・10
抜粋

二、三歳のころは、ひどくおしゃべりで、物真似などが上手だったそうだが、物心つくにしたがって、あまりしゃべらなくなり、独りで何か空想して、夕方など町を歩きながら、声に出してその空想を独白するくせがあった。会話を好まず、独りで物を考える、よくいえば思索癖、悪くいえば妄想癖が、幼年時代からあり、大人になっても、それがなおらなかった。

お婆さん子の、甘えっ子の、内弁慶（うちべんけい）だから、小学校に入って、はじめて社会に接したときには、校庭の隅っこの桜の木の下にポツンと立って、みんなの駆け回るのをボンヤリ眺めているようないくじなしであった。しかし物の理解力はあるほうで、当時の尋常小学校四年を通じて、いつも級長か副級長であった。

そのころは尋常小学校の次に、高等小学校を二年やり、そこで中学の入学試験を受けるのだが、この高等小学校に入ってから、いじめっ子が現れ、いじわるをされたり、肉体的にも、ひどいめにあわされたりして、学校へ行くのがいやになった。中学へ入っても、やっぱり別のいじめっ子がいて、

初出　日本経済新聞　五月三日号‐十日号／昭和三十一年　全六回　日本経済新聞社
底本　江戸川乱歩ワンダーランド／中島河太郎編　平成元年九月　沖積舎

学校は地獄であった。別に先方が悪いのではなくて、こちらが「いじめられっ子」に生まれついていたからだと思うが、そのために、私は社会生活を嫌悪し、独りぼっちで物を考える癖が、ますます嵩じて行った。中学時代には病気と称して学校を休むことが多く、実際病身でもあったものだから、中学五年間の半分ぐらいしか学校へ出ていない。したがって、成績も中位になり、スポーツはむろんやらず、鉄棒もだめ、木馬も飛べないという弱虫で、体操の時間が一番きらい。なかでも器械体操と駆け足にはおぞけをふるった。

こうして私は、学課そのものではなく、まったく別の事情によって、学校を嫌悪し、結果においては学課もだめになるという経路をたどったのである。小学校は名古屋市南伊勢町の白川尋常小学校、その近くの市立第三高等小学校、中学は愛知県立第五中学校（のちに熱田中学と改称）の第一回卒業生である。

第三高等小学校　入学は明治三十八年（一九〇五）四月。

わが青春記

五十七歳

1952・8・8
抜粋

私には「青春期」というような花わらい鳥歌う時期がなかった。その遠因は、私が子供のころ、「いじめられっ子」だったことにあるらしい。

小学校四年生ごろまでは順調だった。たいした「いじめっ子」がいなかったからである。しかし高等小学（別の学校であった。四年制で、そこの二年級を終わって中学に入った）に移ってから「いじめっ子」が現れ、中学に入ってからも、人は違うが、それがつづいた。私は子供のころ病身で、器械体操がまるでできなかったので、同級生の物笑いとなり、それが「いじめられっ子」の最上の資格となった。病気でよく学校を休む。一つは「いじめられっ子」がいやで休みもしたが、ほんとうに病身でもあった。病床の空想生活が現実の生活よりも楽しかった。

休むものだから、学課も優等とはいかなくなり、その方の魅力もだんだんとおとろえて、学校がいっそう面白くなくなった。現実社会というものが私の敵になった。いわゆる劣等感である。「いじめられっ子」にされたというよりも、こち

初出　東京新聞　八月八日号／昭和二十七年　東京新聞社
底本　わが夢と真実／昭和三十二年八月　東京創元社

らがそれに適する性格に生まれ、育っていたともいえるのだが、いずれにしても、このことが、私の生涯に最も強く響いていることはまちがいない。

彼

「僕は皆と同じでないんだ、僕は皆と同じでないんだ」十一歳のアンドレ・ジードは母の前に啜り泣きながら絶望的に繰り返した。

――「一粒の麦もし死なずば」

四十二歳

1936・12・1
◇
1937・4・1
全文

初出　ぷろふいる　十二月号－四月号／昭和十一年－十二年　四回（中絶）　ぷろふいる社

底本　鬼の言葉／昭和六十三年十月　講談社

1

人は生涯のある時期に一度は、その祖先に興味を持つものである。彼にもそういう時期があった。彼は分家の跡取りであったから、先祖の系図を持っていなかったけれど、本家に伝わっているそれを借りて筆写したことがある。

彼は現在の境遇に比べては、案外立派な先祖を持っていた。「豆州伊東之郷、鎌田之住、平井太夫嫡男十郎右衛門、寿百十三歳、貞享二年丑年三月七日沒」というものが、わかっている限りの遥かなる祖先であった。伊豆伊東の郷士である。十郎右衛門の娘が伊勢の藤堂高次公に奉仕して次代高睦公の実母となった縁により、その弟友益というものが藤堂家に召

藤堂高次　慶長六年（一六〇一）生まれ。高虎の子。寛永七年（一六三〇）、高虎の死去により二代藩主となる。寛文九年（一六六九）に隠居、長男・高久が家督を相続した。延宝四年（一六七六）死去。

高睦　寛文七年（一六六七）生まれ。高次の子。兄・高久の養子となり、元禄十六年（一七〇三）、高久の死去により四代藩主となる。宝永五年（一七〇八）死去。

し抱えられ、寛文九年「二十両六人扶持被下置、定府ニ被仰付」とあり、系図ではこの人を平井家の初代と数えている。定府とあるから江戸屋敷に召し使われたのであろう。

二代目陳救というものの代になって、元禄元年御国附となり、のち正徳三年に正式に伊勢の津へ移住した。この陳救という人が、わずかのあいだに恐ろしく出世をしている。天和二年には御小姓役として二十石五人扶持となり、貞享二年には「新知百石ニ被成下」、元禄十年には「加増百石拝領」、宝永四年には突如として「御増八百石被下置、都合千石ニ被成下」ている。太平の世にこの出世はただごとでないが、ちょうどこの宝永四年には彼の伯母に当たる前記高睦公の実母となった婦人が没しているから、当代の高睦公がその実母の喪を悲しんで、母の霊を慰める意味でこの破格の加増をしたのではないかと想像される。

それから三代陳以、四代陳為、五代陳善、六代陳成、七代陳就といずれも千石を被下置かれ代々伊勢の津に定住して平凡に瑕瑾なく勤めている。この七代陳就という者が彼の祖父であった。

今の彼にとって立派な祖先であったが、太平の世とはいえ武功による出世ではなくて、いわば初代の姉に当たる女の力（おそらくその婦人は美貌であったのに違いない）によってその地位を得たのであるから、彼はこの系図を一読した時、

友益　初代。寛文九年（一六六九）、藤堂家に仕え、天和二年（八二）死去。

陳救　二代。元禄元年（一六八八）にお国付となり、正徳三年（一七一三）一月、津に移住。同五年一月、伊賀付となり、享保十八年（三三）死去。四代・陳為が寛延二年（四九）に津付となるまで、平井家は三十四年にわたって伊賀上野城下に居住した。

元禄十年　底本「同十年」を訂した。

実母　法号・松林院。宝永四年（一七〇七）一月二十七日、江戸本郷で死去。行年八十二。同地の瑞泉院に葬る。

少しく物足りぬ感じを抱かないではいられなかった。

祖父陳就は明治十七年に沒していて、写真嫌いで一枚も姿を残しておかなかったので、彼はその風貌を知ることができなかったが、系図の記述によると、代々のうちではなかなかの手腕家であったらしく、鉄砲頭、御側用人、大横目、加判奉行などを歴任し、嘉永三年には江戸増上寺御霊屋御普請の副奉行を勤めたり、文久三年には大和の浪士追討のため出張を命ぜられたり、元治元年には藤堂家領内にある山陵御修覆の御用掛頭取を仰せ付けられ、その功により朝廷より白銀五枚を拝領したりしている。

彼の祖母は京都の東本願寺（あるいは西か）の寺侍本間氏の娘和佐というもので、祖父陳就の後添いであったが、先妻はすでに沒していたけれど、その人が藩主藤堂公の娘であった関係上、正式の妻として披露はしなかったということである。

その祖母は明治四十四年まで生きていて、彼の十八歳の年まで、ずっと一緒に暮らして来た。彼の幼時、弟が生まれて母の乳を離れなければならなくなってから、ほとんど小学校へ入る間際まで、彼は毎晩この皺くちゃの乳房に吸いついて寝たのであった。そして、その皺くちゃの乳を噛んで傷を拵えたことがたびたびあったということである。つまり彼は極度に甘やかされたお婆さん子であった。

大和の浪士　天誅組。文久三年（一八六三）、尊王攘夷派の浪士が大和で挙兵し、津藩は幕命を受けて追討に加わった。

彼はその祖母から、祖父の生活が千石の陪臣という石高で想像する以上に派手やかなものであったことを、いろいろと聞かされた。陪臣ではあっても、多くの家来を召し抱えていたし、邸内にはたくさんの女が召し使われていて、その女達のあいだに党派ができて、陰険な勢力争いの絶え間がなかったこと、元旦であったか、祭礼の時であったか、毎年その日には、祖父は熨斗目の着物の両の袂に、どっさり小粒を入れて、それを座敷に撒いて召し使いや出入りのものに拾わせる慣いであったこと、殿様名代の道中行列の絵のように立派であったこと、それから、御一新の少し前、「お祓いさん」という奇妙な現象が起こって、いつということなく、裕福な家々へ、大神宮のお札が、空からヒラヒラと降って来る（むろん人為的のものであったに違いない。この奇現象については誰かの考証を読んだ記憶があるが、今その詳細を思い出せない）。するとその家では無礼講の大盤振舞をしなければならないのだが、祖父の邸にもその「お祓いさん」が降ったことがあって、その時の乱痴気騒ぎがどんなに物凄かったか。群がる弥次馬が邸内に乱れ入って、用意の酒を飲み御馳走を平らげ、畳もなにも泥だらけにして、「お○○に紙貼れ、破れたらまた貼れ」と合唱しながら乱舞すると、邸内の男達女達もそれに引き入れられて、気違いのように踊り狂い、その翌日からは襖障子の張り替え、畳替え、調度の掃除に忙殺さ

お祓いさん　慶応三年（一八六七）夏、三河地方に皇大神宮のお札が降ったのをきっかけに、「ええじゃないか」と歌い踊る民衆が神宮を目指した。津では十月初旬にお祓いさんが降ったとされ、十一月四日夜から狂乱がくりひろげられた。

お○○に紙貼れ　「慶応伊勢御影見聞諸国不思儀之扣」（日本思想大系『民衆運動の思想』所収）によれば、熱狂した民衆は「おめこに紙はれ、はげたら又はれ、なんでもえじやないか、おかげで目出度」と大騒ぎしながら外宮と内宮に参拝した。

れたという話、そのほかさまざまの思い出話の中に、彼は次の一件を最も興味深く記憶していた。

年代がはっきりしないけれど、祖母が嫁入ったのは文久の末か、元治頃であったから、それより後の出来事らしく思われるのだが、藤堂の城下町津の近在一身田にある真宗高田派の本山専修寺に、「一身田騒動」といって当時世間を騒がした相続争い（？）の毒殺事件があって、祖父はその事件後のお目附役として藤堂家から専修寺に派遣され、祖父自身も危うく毒殺されかかったような出来事があった。そのお家騒動の一条が江戸で芝居に仕組まれ、祖父に当たる人物も登場するというので、祖母はその芝居見物を勧められたけれど、見物に行けば役者が客席へ挨拶に来たりしてはれがましいということを聞かされ、恥ずかしがってついに見物しなかったということである。

彼はその芝居が何という外題であったか、何年に何座で演じられたのか、俳優は誰であったか、歌舞伎年代記をくってみようと思いながら、ついまだ果たさないでいる。

祖母の語るところによれば、祖父は人並みよりは小柄な人物であったが、なかなかの切れものであったらしく、几帳面な一方派手好きで、大酒もしたけれども決して乱れることはなかったという。明治四年隠居を願い出て許されてからは、入道して閑水と号し写経などに余生を送った。その写経の一

一身田騒動　真宗高田派本山は親鸞が嘉禄元年（一二二五）、下野国高田に開いた専修寺だが、同派十世・真慧が東海北陸の拠点として一身田に寺院を建立し、専修寺が兵火で衰退したため本山の機能がここに移されて専修寺と称されるようになった。文久元年（一八六一）、二十世・円禧の死去を受けて相続をめぐる実子と養子の対立が表面化、毒殺まで画策されたが、結局は未遂に終わった。顚末は広く噂となり、一身田騒動として耳目を集めたというものの、いまでは地元でも忘れられている。劇化に関する詳細は不明で、陳就が藤堂家から派遣されたという事実も文献上では確認できない。

部が今も彼の家に残っているが、巧みではないが性格をそのままに実に几帳面な書体である。筆まめな人で、隠居してからは、小抽斗のたくさんついた桐の小机を常に身近に置いて、いろいろの書きものをしていたということであるが、随筆とか日記とかいう種類のものは、むろん書いたであろうが、その後彼の一家があまりにしばしば住居を転々したために、散佚して今は何も残っていない。しかし、その桐の小机だけは長い後まで、真っ黒になって残っていて、彼が名古屋に住んでいた少年時代には、彼の持ち物となっていた。

祖母は祖父に比べて字が巧みであった、寺小屋仕込みの筆太なお家流であったが、男のように力強く巧みであった。彼が小学生の頃、家でお習字をしていると、父が筆を取って直してくれることがあったが、祖母はそばでそれを見ていて、父の字がなっていないといって笑い、その父の字をまた彼女が直してみせるほどであった。

祖母の書いたものでは、今でも手製の百人一首が残っている。歌は祖母のお家流、絵は父の手すさび、器用な父が彩色を施し、裏打ちをして、なかなか手際よくできている。今では表面がけば立って、ひどく汚れているが、活字の歌留多なんかよりも、どんなにおもむきがあることか。

2

彼は時々、彼がこの世に生まれて最初の記憶が何であったかを思い出そうと力めることがある。しかし、それは正確にはわからないことかもしれない。真実見聞した直接の記憶でなくても、物心つくようになってから、祖母とか母とかから彼の幼時の思い出話を聞かされ、その言葉から生じた幻影が、直接の見聞の記憶ででもあるように信じられている場合が存外多いのかもしれないからである。

そういうふうに考え出すと、どれが本当の記憶だか、何もわからなくなってしまうのだが、彼にはあれがそうではなかったかと思われる、絵のように残っている一つの場面があった。西洋の小説家のオートバイオグラフィなどを見ると、非常に早い記憶が詳しく書いてあるものもあるが、それらが作者達の今いったような思い違いでないとすれば、彼が性慾や文学心や世間のことにすべて晩稲であったように、彼の最初の記憶もまた人並みよりはおくれていたのかもしれない。

あとから考え合わせると、それは彼の二歳の時の記憶であった。最初に大きな石灯籠が現れる。その灯籠の段々になった四角な台石の下から二段目に、きめが細かくて非常にもろい砥粉のような、しかし少し赤茶けた土の塊が幾つか載っている。小さい手が、その土の塊を小石で粉々にくだいている。それはあまり綺麗ではない田舎者らしい五、六歳の少女であ

る。少女は二人か三人かいて、お砂糖屋ごっこをしているのだと思う。二歳の彼は一人の色の白い痩せたお婆さんの背中からおりて、お婆さんに手を引かれて、チョコチョコ歩いて、石灯籠に手をかけて、背のびをして、その砥粉のような土の塊を覗いている。たぶん摑みたいのであろうと思う。しかしまだ摑んではいない。そういう絵だけが残っている。視覚ばかりで聴覚はないのである。

その景色は三重県亀山町の高台の上にある権現様の社の石灯籠であったことが思い合わされる。彼の両親の家はその社のすぐそばにある藁葺き屋根の家で、祖母は彼をおぶって、毎日のようにその権現様へ遊ばせに行ったのだということである。権現様の境内の一方が深い崖になっていて、下は見渡す限りの田圃、その田圃の中を遥かにおもちゃのような汽車が走って行く。ビーッピと可愛らしい汽笛を鳴らして走って行く。彼はその汽車を見ることが、何よりも好きであったということだ。

しかし、彼はその亀山町で生まれたのではない。同じ三重県の名張町という、亀山よりはもっと辺鄙な小さい町で生まれたのである。

明治十七年彼の祖父が沒してからの祖母はみじめであった。禄に離れた時にはかなりの貯えもあったのであろうけれど、祖父の長男が経済的にまったく駄目な性格であったのと、そ

の兄弟の一人にその土地で誰知らぬものもないならず者があって（この二人とも祖母の腹ではない）、それが長男や隠居している祖父から金品を強奪せんばかりにして引き出して行くために、次第に貯えを失い、祖母は祖父が生前縁故のものに預けておいたわずかの元金から月々の支給を受けて一人ぼっちで暮らさなければならなかった。

祖母に二人の子供が生まれていたが、年下の男子は他家の養子となり、頼るものは年上の男子一人であったのに、その子供は、まもなく母のもとを離れて、当時創立まもなかった大阪の関西大学に遊学することになった。これが彼の父の繁男である。

繁男は関西大学の法科に入学して、半ば苦学をしながら優秀の成績でそこを卒業したが、すぐ母のもとに帰ろうとはしないで、たぶんどこかの弁護士事務所に勤めたのであろう。自活の道を立てながら、司法官試験の準備をつづけていた。しかし、この維新後の一家の零落や、繁男の大阪での生活については、彼にはこれ以上詳しいことは何もわかっていない。

繁雄はいつまでも大阪に踏み留まって、司法官になりたい意志であったが、一人ぼっちの母がそれを許さなかった。彼女は長いあいだわが子と離れている淋しさに癪というものを覚えた。頻々として猛烈な胃痙攣に悩まされるようになった（ではなぜ母は大阪へ行って息子と同棲しなかったのか。お

そらくは母の側には先祖の土地を離れたくない旧弊な気質があったのであろう。息子の方には自由な一人の生活を望む青年のわがままがあったのであろう。しかし、それも本当のことは、今の彼にはもう何もわからなかった)。

「私が一人ぼっちで死んでしまってもよいのなら、帰って来なくってもいい。そうでなければ早く帰っておくれ」

という母からのきびしい手紙に、息子はひとまず司法官への野心を捨てて、仕官の道を講じなければならなかった。そして職業についたのが、旧藤堂家の領地伊賀の国名張町にあった郡役所の書記であった。母の願いはやっと叶って、この町に息子と二人の生活を営むこととなった。

名張町に移るとまもなく、津市の親戚のものの勧めで、繁男は今までまったく見も知らなかった同地の一人の娘と見合いをすることになった。娘は同じ藤堂家の家臣であった本堂帆之助の長女「菊」である。見合いは滞りなくすんで、やがてこの二人が前記の親戚のものの媒介で結婚の式を挙げたのが明治二十六年のことであった。

彼はこの二人が結婚当時お互いに抱いた感情を聞かされたことはなかった。おそらくはごく平凡な仲人結婚の新夫新婦が味わう感情を想像すれば大過ないのであろう。見合いの前に、一応お互いの写真を取り交わしたということで、その写真が今も彼の家のアルバムに色あせて残っているが、新婦の

菊とその母とは、写真の修正ということを知らなかったものだから、繁男の顔にその修正のあとが細かい白点になって見えるのを、菊石ではないかと心配して、仲人に確かめたという話があるのでも察せられるようなそういう結婚であった。

結婚の翌年、新夫婦のあいだに男児が産まれた。それが彼である。父は二十八歳、母は十八歳であった。

3

彼の父は学校を出ると地方の小吏を数年勤めているうちに、学校の先輩の勧めによって、東海紡績連合会の書記に転じ、同連合会の名古屋支部書記長というようなものから、徐々に名古屋実業界に接近し、名古屋商業会議所の嘱託、同地資産家の支配人、それから、輸入諸機械の取次販売、外国保険代理店、石炭販売などの兼業の店舗を開くようになり、同時に一方自宅では、その頃はまだ珍しかった特許弁理士の業務を始め、両方の店員事務員をあわせて十数人、正月などには、石炭部の仲仕が数十人、店の紋章入りの法被を揃えて挨拶に来るといった、なかなかの全盛期もあったのだが、やがて、商家生まれではない父の性格から来る放漫なやり方と、石炭部の営業上の失敗などから、ついに収拾のできない破綻を生じ、店舗を閉じなければならないことになった。それがちょ

名古屋　明治三十年（一八九七）春から年末または翌三十一年初めまで「園井町？　蒲焼町通二テ島田町ト桶屋町ノ間」、同三十一年末まで「葛町」、同三十三年末または翌年初めまで「南伊勢町ぬ百二番戸」、同三十四年六月末まで「栄町電車通」、同四十五年六月まで「南伊勢町二番戸」に居住。平井商店は同四十一年から四十五年六月まで南伊勢町に所在。同四十二年の『名古屋商工人名録』によれば業種は諸機械兼仲買現物、営業所は中区南伊勢町乙二。

うど彼の中学校卒業の年であった。

父は本来の司法官志願を長いあいだ捨てかねていた。実業界に転身してからも、法律関係の書物が書架の主座を占めていたし、それより前、明治三十二年には大阪駸々堂から『改正日本商法詳解』という七百五十ページの大著を出版しているほどで、実業界への入り方も、商法実践の角度からであったし、後に特許代理業を兼営したのも、法律的な才能と興味とからであったに違いない。

父は法律的な意味での論理家であった。生活の一切をそういう論理によって捌いて行こうとした。そこに商人としての破綻があったのだと思う。話が非常に早くわかった。紆余曲折が嫌いで、人の話でも半分聞いて、結論を結論をと責め立てるような気短かであった。普通の人が十言で表現する事柄を、父は一言で表現した。要点を掴むことが巧みであった反面に、細目の感情にうといところがあった。

思想としては明治時代勃興期ブルジョワジーの進歩的な人々に共通した自由主義者であった。むしろ極端といってもいい自由主義者であった。そこにも個人商人としての破綻があったのではないか。当時の大組織商業の経営は多くこの自由主義によって成功したのであるが、それをただちに個人経営の小商店に持って来たところに錯誤があったのではないか。父は個人経営などよりは、むしろ大組織商業の使用人として、

あるいは相談役として、もっと大成する人ではなかったかと考えられる。

父はなかなかの精力家で、小まめで、そのうえ仕事の捌きが非常に早い方であったから、友人などから人並みの五、六倍の仕事をするといわれたほどであったが、一面かなりの遊び手で、酒はひどく好きだったし、官吏時代から商業に失敗するまでのあいだ、遊里（ゆうり）とは縁は切れなかった。悪友も少なくはなかった。

そういう父の素質から、彼はどの部分を譲られ、どの部分を譲られなかったか。自由主義はおそらく影響を受けたであろう。物の要点を摑むこと、話の早わかりがすること、論理好きの性格なども、譲り受けているであろう。しかし、精力的なこと、仕事の分量の多かったこと、少しでもじっとしていられないほど小まめであったことなどは、背の高さや飲酒癖とともに、彼は父とはまったくの逆であった。父と子とは、それらの点で他人のように似ていなかった。

彼にはそのほかにも、父からの影響としては、どうしても考えられない幾つかの素質があった。父は詩を解しなかった。いわゆる芸術的なものを、高度のものも低度のものも、ほとんど理解しなかった。父の書架はかなり大きい面積を持っていたが、どうかした拍子に予約申し込みをした大日本文明協会の飜訳叢書（ほんやくそうしょ）のほかには、文学がかった書物は一冊もなかっ

た。そういう書架にハッガード原作菊池幽芳訳の『二人女王』がたった一冊混じっていたのは、ほとんど奇蹟といってもよかった。

父はよく芝居を見た。しかし、それは遊里の人達に誘われるか、店のものや家族を楽しませるための観劇であって、芝居そのものを芸として理解したのではなく、むしろ、緋毛氈の桝の中で酒を呑みながらの、あの華やかな雰囲気を愛したのであった。父は途切れ途切れではあったが、老年に到るまで謡を稽古していた。家族の前で朗らかに謡をうたうような趣味もあった。しかし、それは、主として健康と社交のための道楽であって、音楽を理解したわけではなく、父の耳は半音の差を聞き分けられない程度の耳であった。したがって声であった。幼年時代の素読のお蔭で漢文は少し読めたし、漢詩も読み下すことはできたけれど、自分ではほとんど詩作したこともなく、小説類はまったくといってもよいほど読まなかった。女子の読みものとして軽蔑していた。

ここに父と子の違いがあった。彼は少年時代から現実の世界よりは、むしろ架空の物語の世界に惹きつけられた。現実を嫌悪して詩に逃れる傾きがあった。芝居でも寄席でも、お伽噺でも大人の小説でも、それをこそまったく別な現実世界として、あこがれ溺れる傾きがあった。音楽も、専門の智識は持つ機会がなかったけれど、音痴ではなかった。

ハッガード　ハガード。Henry Rider Haggard（イギリス、一八五六―一九二五）。「二人女王」は原題「Allan Quatermain」（一八八七）。邦訳は明治三十六年（一九〇三）、春陽堂刊。

これらのものは、決して父から譲られたのではない。では、どこからか。遠い先祖は別として、彼の理解し得る限りでは、それは母からのものであった。母は高等の教育を受けていなかったから、高い文学はわからなかったけれど、素質としては、芸術肌なところがあった。音楽の耳もあったし、芝居や小説にも繊細な理解力があった。家庭の主婦としては、気の弱い何の主張もない婦人であったが、彼女の内部には、現実とは違った別の世界があったと感じられる。

母は強い個性はなかったけれど、理解力と同化力とに、ある意味での文学的なものが感じられた。低度のものではあるが、芝居や音楽や小説を、その真髄において理解する素質があったし、それと似た意味で、移住した場合などに、その地方の方言を自分のものにすることが早かった（真似は十分できるのだけれど、その口調をややひかえ目にするほどの神経があった）。これは一種の虚栄心でもあったが、他人の感情なり神経なりを、正当に理解する一つの文学心であった。「芸」の心であった。これらのものを、彼は母から受けている。

母の父すなわち彼の母方の祖父には、何かしら「芸」を愛する心が感じられた。その祖父はもと他藩の武士であったが、青年時代勤王の志を立てて、郷国をあとにし、どういう働きをしたのかは母も聞き伝えていないのだが、結局は一種の放

浪児となって伊勢に流れつき、その土地の百姓の娘の入り婿となって、藤堂藩に仕えることとなった。むろん低い身分であった。何か志操の一貫しないもの、優柔なものが感じられる。維新後は別に職業を求めるでもなく、晩年には入り婿をした家の田地をほとんど売り尽くしているような状態であった。そうして何をしていたかというと、祖父は書画を愛したのである。ことに老年になっては同好の人々を招いて、お茶を啜りながら書画を眺め、骨董を語るのを唯一の楽しみとした。家計のことも、子供のことも（子供は二男二女であった。彼の母はその長女である）祖母に任せきって、悠然として趣味に生きていた。勤王の熱情、放浪、そして、老年書画を愛する心、これらの性格に、何かしら彼の同感をそそるものがあった。彼の父母と祖父母を合わせて六人のうちでは、この母方の祖父に、やや彼自身に近い血が感じられた。

祖母は百姓の娘のことゆえ、まったく祖父の趣味を理解することはできなかったが、なかなかのしっかりもので、不平はこぼしながらも、祖父の道楽と居喰いのために傾いて行く家計を、少しでも喰いとめることに一心不乱であった。近隣や親戚の人々のあいだでは働きものとして通っていた。

母はそういう父母の家に育って、小学校を卒業すると、嫁入り支度の行儀見習いのため、津市（当時祖父の家は津の市街地にあった）とは隣接の一身田の専修寺へ奉公にやられ、

父に嫁ぐまでのあいだを、そこに御殿女中のような生活を送った。同寺の貫主には皇室御縁故の方を頂いていたので、貫主夫人は「お裏さん」と唱え、母はその「お裏さん」づきの小間使いであった。彼は幼時、祖母（父方の）からは千石生活の華やかな昔話、母からはこの御殿生活の思い出話を、こもごも聞かされたものであった。

母はなかなか利かぬ気の少女であったという。それはおそらく祖母譲りの性格であろうが、小娘の時代にも、決して遊び友達に負けてはいず、男の子のようにおてんばであったし、一身田に御奉公してからも、その勝ち気なところが「お裏さん」の気に入っていたというほどであった。それが父の家に嫁入ってからは、まるで手の裏を返すように、内気なおとなしいお嫁さんになってしまった。これは姑に当たる祖母が、母よりもいっそう勝ち気であったためかもしれない。また、論理ずくめの法律書生のようにぶっきらぼうな父の態度に、けおされたのかもしれない。母は「嫁入り当座はお父さんが怖くてビクビクしていた」と漏らしているが、嫁入りの年が十七歳の子供であったことなど考え合わせると、そういう性格の変化が来たのも無理はないのかもしれぬ。いずれにもせよ、母は父に対しても、祖母に対しても、少しも自説を主張せぬ、唯々諾々の態度を変えなかった。そして、祖母を見送り、父を失って、今は彼と彼の弟達の母として残った彼女は、

やっぱり子供達に対しても、ほとんど自説を主張せぬ唯々諾々の母であった。これを彼女の父母の性格にあてはめてみると、嫁入り前の母はその母に似た勝ち気、嫁入り後の母はその父に似た好人物、そして結局は父の方の性格を受け継いでいるのだとも考えられる。好人物とともに非現実を解する心を、父から受けついで、それを子供達へ。彼等兄弟は、多かれ少なかれ、この母の傾向を譲り受けていたのである。

父と母と、母方の祖父、祖母の性格についてごくあらましを語った。そして、彼自身がそれらの人々から何を受けているかを、大ざっぱに考えてみた。父方の祖父の性格については、先に少し記した以上ほとんど知るところがない。父方の祖母、彼が小学校へ入る間際まで、その皺くちゃの乳房に縋っていた祖母の性格については、まだ何も語っていないけれど、不思議なことに、彼はこの最も彼を愛してくれた祖母から、何を受けついでいるかを知らないのである。

祖母は前にちょっと記した通り、なかなかの勝ち気ものであったこと、彼の知ってからの老年時代には、御幣かつぎで、小言幸兵衛のように口やかましかったこと、父とは反対の倹約家で、父と意見が合わなかったことなどを思い出すけれど、それらが彼の性格にどういうものを伝えているか、ほとんど考え及ばない。強いていえば、おめかしくらいのものであろうか。

子供達　太郎（明治二十七年生、昭和四十年没）、金次（明治三十一年生、同三十二年没）、通（同三十三年生、昭和四十六年没）、あさ（明治三十四年生、同三十八年没）、敏男（明治三十六年生、没年不詳）、たま（大正五年生、昭和七年没）。

祖母は老年の容貌から想像しても、噂を聞いても、若い時代は美しい人であったに違いない。その美貌が祖父の注意を惹いて、わざわざ京都から後添いに迎えられたものに相違ない。皺くちゃの老年になっても、外出する時には、入れ歯を鉄漿で黒々と染めて、丁寧に眉毛を剃って、生え際の無駄毛を毛抜きで抜いて、薄化粧さえして、京都ふうの上手な着物の着かたで、後室様みたいなシャンとした形で、外出したものである。身だしなみといえば身嗜み、おめかしといえばおめかしである。

父は実用以外にほとんどおめかしを解しない人であったし、母は女のことだから、むろん一通りのお化粧はしたけれど、姿形がどことなく田舎田舎していて、気取りも似合わなかったし、自分でもそれをよく知っていて、ひどいおめかしをすることはなかった。また母方の祖父母にも、そういうことはほとんどなかったように思われるから、彼にあるおめかしの心持ちは、おそらくこの父方の祖母から譲られたものであろう。

ここまでに考えて来たことを一口にいえば、彼は、父からは自由主義的な物の考え方と、論理好きと、要点を摑むこと、つまり物わかりの早さとを譲り受け、母からは「夢」と「芸」とを解する心を譲り受け、間接に母方の祖父からは、家計に無関心な趣味生活と、もしかしたら放浪性とを譲り受

け、父方の祖母からはおめかしの心を譲り受けたかと思うのだが、むろんこれはごく大ざっぱな考え方で、あまりに身にしみ過ぎていて、かえって彼自身には気附かない大きな遺伝もあることであろうし、ここには書ききれない。またもう一つ奥へ行けば、彼自身考えることもできないような、微小な無数の網の目の遺伝と感化の性格があることであろうが、それはこの文章の及ぶところではない。

彼の現在の性格は、ほとんどこれらの人々から伝えられたものに尽きているとも考えられる。そのうちのあるものは、彼の場合には元の形よりも縮小し、あるものは元の形の何倍かに拡がってはいるけれども、父母、祖父母に萌芽（ほうが）のないものはまったくないといってもよい。

むろん彼にはこれらのもののほかにも、さまざまの著（いちじる）しい性格があった。たとえば、彼の少年時代からの人並みならぬ同類嫌悪の感情である。それは厭人癖（えんじんへき）、孤独癖、外に現れては非社交性となるものであるが、彼の場合は、その傾向が肉親嫌悪にまで進んでいた。この彼の異端者の性格については、こののちしばしば語る機会があると思うから、ここには詳説を避けるが、この性癖さえも、大部分は環境に育てられたものとはいえ、もし同じ環境にあっても、彼でなかったらこんなことにはならなかったであろうという、何かしら先天の萌芽のようなものがあった。父にも、母にも、祖母にも、母方

の祖父母にさえも、彼のように表面には現れなかったけれど、どこかしら世間並みよりは非社交的なものが感じられた。

父は大酒家であったし遊び好きであったから、むしろ社交家らしい外貌を備えていた。酒宴の席を愛し、酔えば端唄を歌い、必ず立って踊ったものである。祖父と同じく派手好きで、広く人と交わり、足まめに外出もすれば、訪問者をも歓迎した。それにもかかわらず、どこといって明確に捉えることはできないが、彼はその父にさえも厭人的なものを感じていた。母も力めて愛想よく社交を心懸ける方ではあるが、彼女には父以上に厭人的なものが感じられた。

しかしこの考え方は誤っているかもしれない。人類は例外なく厭人的な性格を隠し持っているのかもしれない。肉親嫌悪さえも、万人共通の感情かもしれない。それを隠し、それに打ち勝ち、自れを殺して相交わるのがすなわち社交なのかもしれない。肉親だけに厭人癖の萌芽のようなものを感じたのは、彼が内側から観察する立場にあったためで、誰の子も皆その父母に同じものを感じ得るのかもしれない。もしそうだとすれば、非常に単純にいえば、厭人癖とはわがままの別名に過ぎないことになり、結局は程度の問題に帰着する。ただ彼の環境が、そういう性癖を著しく増大する方向に働いたというまでのことである（それがどのように働いたかは、後にしばしば述べるであろう）。

またたとえば、彼が父母からは受けていないように見えるもう一つの著しい性格がある。ワイニンゲルはすべての男性女性には、それぞれ精神的にも肉体的にも、幾分の異性的なものを含んでいて、人によってその程度がさまざまであることを説いたが、彼にはそのワイニンゲルの意味での女性的分子が、通常人の平均よりは多量に含まれていた。肉体的には、声帯部の突起が常人よりも発達していないこと、撫で肩、腰部骨盤の発達などを軽微に自覚するばかりで、外見上それとわかるほど著しいものではむろんなかったが、しかし、心理的にも女性分子のやや多量であることは争えなかった（これについても後に詳しく触れる場合がある）。

この人間に含まれる異性分子の多寡が遺伝するものかどうかは知らないけれど、少なくとも先天性を否定することはできない。父母はまったくあずかり知らぬこととはいえ、父母なくては生じなかったところのものである。

以上で彼の生まれながらの性格の大体を述べた。ここにいい漏らした性格については、思い出すごとにつけ加えるつもりであるし、またこれらの性格が、環境の力によっていかに発達し、あるいは変形して行くかは、これより記そうとするところである。

4

ワイニンゲル　ヴァイニンガー。Otto Weininger（オーストリア、一八八〇―一九〇三）。明治三十九年（一九〇六）、片山孤村による抄訳『男女と天才』（大日本図書）が、大正十四年（一二五）、村上啓夫による全訳『性と性格』（アルス）が出た。

彼の二歳の折りの生まれて最初の記憶については先に述べたが、それは閃光的な、映画の一齣あるいは数齣の印象に過ぎなかった。それからまもなく、大暴風雨のやはり閃光的な印象が残っているほかには、四歳（あるいは五歳の初め）のある日の一場面まで、まったく記憶が途切れている。その一場面というのは、彼が筒袖の着物の上から、父の洋服のチョッキを着て、その胸には父の時計の銀鎖を纏い、赤十字社の勲章をつけ、腰にはおもちゃのサーベルをさげ、おもちゃの将校帽を冠って（彼は幼時頭髪をおかっぱにされていたが、その時もおかっぱであったかもしれない）、広い住宅の部屋部屋を歩き廻り、敷台になった玄関を降りて、父の大きな靴を履き、それとサーベルとを引きずりながら、大きな門を出て、門の屋根の下に立って、往来の人達を睨み廻して、独りで威張っていた光景である（むろんこんなに詳しく記憶があるわけではない。後日聞き知った細部が加わっている）。記憶には、光景だけで、何の感情も残っていないが、聞くところによると、彼にはその頃まだ友達らしいものはなく、家族のもの、母や祖母や書生などを相手に、一人で威張ってみせていたものだという。その異形の風体で門前に立っていると、近所の子供などが近寄って来たが、彼は別に子供達を仲間にして遊ぼうとするでもなく、彼等を異国人のように睨みつけ

て、ただ威張っていたということである。彼はその頃まだ、家庭以外の世界をほとんど意識しなかった。外にいる彼と同年輩の子供達が、彼の同類であることを知らなかった。おそらくこれは、ただ甘えっ子という以上に、千石取りの奥方であった祖母の町人蔑視の感情が、無意識のうちに彼に伝えられていたのであろう。その実町人の子こそ思いも寄らない恐るべきものであることを、やがて彼は悟らなければならなかったのだが（この記憶の場所は名古屋市葛町である。彼の父が紡績連合会に勤めて同市に引き移ってから一年ほどのちのことである）。

これに続く幼時の記憶は、父の怖さを象徴する折檻の場面であったが、それについては後に記す機会があろう。そしてこれら三、四の印象を除くと、彼は小学校に入学する一年ほど前まで、ほとんどほかに記憶というものが残っていなかった。思い出そうとしても、具体的には何も思い出すものがなかった。彼の知能は少年時代からすでに記憶力にかけてはおそらく水準以下であったのだ。

彼自身の記憶を離れて、家族の目に写った彼の幼時の特徴についても、それほど多く語るべきことはない。著しいものを指折ってみるならば、幼児の彼の容貌が、祖母のひいき目の褒め言葉では、いわゆる「卵に目鼻」であって、明治時代の標準美人型に似た大柄な目鼻立ちと、白い細かい皮膚を持

っていて、それが祖母の自慢の種であったこと（そして、それが彼自身にとっては、後の少年時代に、はなはだしい悲しみの種となったのであるが）、彼はごく幼時は非常なお喋りで、むろん這い這いよりも口をきき始めた方が早く、人見知りを覚えるまでは、お愛想をしてくれるよその大人達に向かって、片言まじりの非常な雄弁で、物真似入りで、いつ途切れるとも知れないお喋りをしたということである。この雄弁がまた祖母の自慢の種であった。

　彼は素質としてはお喋りに生まれついていたのであろう。彼自身の異端者をおぼろげに自覚し始めた五、六歳以後でも、彼はむっつり屋というほどではなかったし、小学校という異国の世界に放り込まれて、校庭の桜の木の下に立って、悲しげに他の子供達の遊びたわむれる様を眺めていた彼も、三年生の頃には、学芸会で演壇に立ってお喋りをしたほどであるし、それから中学校の初年級時代には、級中の話術家の一人であったし、大学へ入ってからも雄弁会などに加入して演壇に立ったこともあるし、親戚の居候になっては、親戚の子供に、家庭教師になっては、その生徒達に、なかなか雄弁に次から次とお伽噺をして聞かせたものでもあった。

　これらの事実から、読者もおそらく気附かれるように、彼の幼児のお喋りは社交的会話とか座談とかいうものではなかったらしいのである。お喋りはお喋りでも、それは聞き手が

謹聴してくれる場合だけのお喋り、大人の世界でいえば、座談の才能と演説の才能とは別物だという、あの演説の方のお喋りであって、ここにも彼の非社交的性格の一端が覗いていたのだといえよう。

もう一つ、彼の幼時の特徴として算えられるのは、口をきき始めてから二、三年、つまり人見知りを覚えるまでのことであろうが、彼はなかなかの即興詩人であったということである。亀山町に住んでいた頃に、家の裏に自家用の畑があって、茄子や胡瓜が生っていたが、彼は祖母や母の背中からそれを眺めて、出鱈目の文句で、出鱈目の節で、茄子と胡瓜の歌を歌った。彼は相手がいない時も絶えず半ば歌うように何か喋りつづけていた。そして、それが皆茄子の賦と同じようにそのつど目に触れたものを歌にしているので、大人達を感心させたというのである。

これはもしかしたら、彼の祖母からの影響であったかもしれない。祖母は京都にいた娘の頃、上方の地唄を習い覚えていて、老年になっても、どうかして三味線を持つようなことがあると、なかなか巧みに歌ったり弾いたりしたのだから、幼時の多くの時を祖母の背中に過ごした彼は、子守唄のように口ずさむ彼女の三味線唄を、つい脳裏にしみ込ませてしまっていたのかもしれない。彼の即興詩は祖母の口ずさみの真似事であったのかもしれない。

彼のこの妙な癖も、恥ずかしさを知り始める頃には、もう人前では口には出さぬようになっていたが、しかし、心の中の即興詩は、少年となり青年となっても、ほとんど衰えることなく続けられて行った。彼は人通りのない夜の往来を歩いている時などには声に出して、あたりに人のいる時には心の中で、いつも何かを喋っていた。節をつけて歌っていた。そして、誰にでもあることだけれど、彼には人並み以上に強かったこの独り言の性癖が、彼に孤独の懐かしさを教えた。一日でも二日でもまったく孤独のない時が続くと、彼は烈しい飢餓を感じた。会話なんかで邪魔立てしてくれるな、俺は俺自身と話したいのだという願いが、空腹のように襲って来た。

これは別のいい方をすれば、放心を楽しむ心であった。彼は五つ六つの頃から、家庭の一間で、祖母と母とが針仕事をしながら世間話をしているそばに寝ころがって、彼自身は別のことを考え、無言の即興詩を歌っていることを好んだ。のちには、友達と遊んでいても、相手が一人きりの時にはそうもできなかったけれど、二人以上の時には、彼等の会話を聞きながら、それには加わらないで、放心状態にいるようなことが多くなった。そして、心の中ではその場の会話とはまったく別の即興詩を歌っていたのである。

しかし、やがて、そういう幼児が浮世の風に当たらなければならなかった。家庭の外の異国人の世界へ入って行かなけ

ればならなかった。その最も著しいものは小学校への入学であったが、それよりずっと早く、彼が初めて異国に接触させられてほとんどなすところを知らなかった一挿話がある。

それは彼自身にはまったく記憶がないけれども、前に書いた父のチョッキを着てサーベルをさげたのとほとんど同じ頃の出来事であった。その時分には一町内に一軒くらいの割合で、焼芋屋というものが全盛であったが、冬になるとその焼芋屋の店頭には町内の子供達の黒山が築かれる。この盛んな光景を見て、彼の祖母が妙なことを思いついた。「うちのぼん（坊やの意）と同じくらいの四つか五つの子が、みんなおあし（金）を持って、焼芋を買いに行ってるが、うちのぼんにあの真似ができるかしらん。一つ試しに一人で買いにやってみようやないか」祖母は母とそんな相談をして、彼を連れて町内の焼芋屋の近くまで行き、彼に一銭玉を握らせて「サア、ぼん、焼芋買うといで。みんなとおんなじように、あこいて、このぜぜ渡すんや。ほて、お芋貰ろてくるんや。ええか」いわれるままに、彼はほとんど無神経に芋屋の店内へ入って行った。しかし、そこにうじゃうじゃかたまっている町内の子供達とはまるで違って、物の売買ということをまったく知らなかった彼は、焼芋の竈の隅へ一銭玉を置いたまま、黙って、馬鹿のように突っ立っているばかりであった。他の子供達はワイワイと芋屋の爺さんをせき立て、順番を追い抜

いても、早く芋を渡して貰おうとあせっている中に、彼だけは薄のろの看板みたいに、ただボンヤリ突っ立っているのだから、いつまで待っても、爺さんが芋を渡してくれるはずはなかった。祖母はもう辛抱ができなくなって、自分で芋を買って、彼を連れ帰ったが、それ以来彼は「あかん、ぼん」ということになった。「内弁慶の外すぼまり」と相場が極まった。これが彼の社会への接触の幸先の悪い第一歩であった。

彼の幼年時代は、彼が自慢であり、彼を目の中へ入れても痛くないほどの祖母と、柔和な母との愛によって、幸福過ぎるほど幸福に育てられた。もし不幸があったとすれば、あまりに甘やかされたことと、たぶん同じ原因から来た病弱とであった。ことに彼の病身は、五歳であったか六歳であったか、弟ができて乳離れの憂き目を見た時から、いっそう著しくなったように思われる。乳離れの時には、もう物心ついていただけに、幼年のヒステリーが烈しくて、まるで螽蟖のように痩せ細ってしまった。そういうことから、甘い祖母が母に代わって彼に添い寝をしてくれるようになり、前にも記した通り、小学校へ入る前年まで、彼は夜だけではあったが祖母の皺くちゃの乳房をしゃぶりつづけた。

それ以来中学校を卒業するまで、ほとんど例外なく年に二、三度は重い病気をした。風邪からの熱病がなかなか治らなかったり、胃腸をひどく害して長く床についたりすることがし

ばしばであった。氷嚢（ひょうのう）と体温計と甘いけれども苦い水薬とが、彼には少年時代への懐かしい郷愁でさえあった、発熱そのものにすら妙に甘い楽しさを含んでいた。熱病の悪夢の中で、彼はもう一つの世界である幻影の国の、この世のものならぬ色彩を見た。彼の即興詩は熱病の床の中で育てられて行った。

彼に絵を描く興味が芽生えたのも同じ病床の中であった。治癒期に入った彼の枕下（まくらもと）にはいつも石盤と石筆とがあった。初めのほどは彼自身の形を描くことはできなかったけれど、その頃（五、六歳の頃）母の一番下の弟、つまり彼の若い叔父さんが勉強のために彼の家に同居していたので、その叔父さんが描いてくれる黒い石の上の白い絵に魂を吸いよせられた。トンネルの中から出て来る汽車の絵も好きであったし、鎧武者（よろいむしゃ）や軍人の絵も好きであったが、「絵探し」ほど彼を喜ばせたものはなかった。枯れ木の枝とばかり思っていると、その枝の線が馬の首であったりする線の一人二役、あの「絵探し」というものを、若い叔父さんはいろいろと描いてみせて、彼に隠れた形を探させるのであった。「謎」というものの魅力が初めて彼の心を捉えたのは、この叔父さんの「絵探し」であった。

同時に、叔父さんの絵心が彼に絵というものの興味を教えた。この叔父さんはその頃たぶん十六、七歳であったのだが、後には写真術を修得して、写真館を開きかけたりしたほどあ

って、いくらか美術心を持っていたのに違いない。それ以来小学校へ上がるまで、少しも文字を教えられなかったので、彼は病床に腹這いになって絵ばかりを描いた。それゆえに彼は病気が楽しいほどであった。紙にメンコに似た絵を描いて、それを丸く切り抜いて、幾枚も同じようなものを拵え、家人や遊びに来た近所の子供に分け与えて喜んでいたこともある。それはいわば彼のジャーナリスト的な嗜好の最初の現れであった。ある時、文字を知らないけれど、何か言葉が書きたいものだから、彼は絵文字を発明した。「盲目暦」というものがある。あれと同じような工夫をして、絵でいろいろな言葉を書いた。それも病床の楽しみの一つであった。

病床ほど孤独の楽しみを教えるものはない。氷嚢、体温計、苦いけれど甘い水薬、熱病の夢、即興詩、石盤と石筆と、紙と筆と、そして絵と、絵文字と、この豊富な魅力が彼を病床に、引いては病気そのものに惹きつけた。強いて病気になろうとする気持ちさえ芽生えて来た。彼の少年期から青年期へかけての病身は、一つはこの病床への魅力、それのなせる業であったかもしれないのである。

5

彼の記憶がやや連絡を持ちはじめるのは、数え年五歳の頃

からである。しかし、連絡といっても、それは抽象的な観念の上の連絡であって、具体的な個々の出来事の年代や順序はほとんど思い出せない。その六歳から、八歳で小学校へ入るまでのおよそ二年間に、彼にどういう世界が開けたかを、幾つもの事項について記してみる。

まずその頃の彼に人間としての生存というものが、どんなふうに感じられていたか、生や死について、あるいは宗教的な感情について、彼は何事かを考えていたか。人の一生が人類史の縮図に似ているという意味から、また彼自身の現在の関心から、そういうことを朧ろげな霧の彼方に探るのも無意味でないように思う。

幼い子供は案外多くのことを考えているものである。大人達は彼等自身の幼時を忘れて、子供は皆頑是ないもの、何もわからないものと極めてしまい、幼児の前で、妙な符牒を使いながら性のざれ言などを口にして憚らないけれど、幼児はそういうことをさえ、彼の能力の範囲でほとんど理解している。理解していても幼児の羞恥から、そしらぬ顔をして、おもちゃに気を取られているふうを装っている場合さえないではない。それと同じに、生や死や宗教的な感情についても、幼児は、利慾に多忙な大人達よりもむしろ敏感である。

彼の家の宗旨は先祖以来禅宗であったが、彼の家庭にはほとんど信仰生活というものは見られなかった。父は先にも書

いた通りむしろ極端な論理主義者自由主義者であって、信仰を軽蔑していたし、母もそれに近く、ただ祖母だけは信心信心ということを口にし、先祖の祭りも大切にしたけれど、それは一つの行儀作法、あるいは悪事災難よけみたいなもので、祖先を敬い、その加護によって一家の安穏を祈る以上には出でなかった。前に彼の祖母を小言幸兵衛に比べたが、それと似た意味で彼女はまた担ぎ屋でもあった。シ（死）の字を忌み嫌ったし、首を斬るとか首をつるとかいう言葉を聞くと「鶴亀鶴亀」と口に出して唱えた。祖母は真実その通りに考えていたのである。彼女ははなはだしく死を恐れた。父の就職以前にはずいぶん浮世の苦労を嘗めていたのだけれど、少しも厭世家とはならなかった代わりに、未来の救いをも信じることができなかった。彼女の信心は老年となり死病にとりつかれてからでさえも、あくまで現世の利益に対するものであった。現実家には極楽はお伽噺でしかなかった。

そういう家庭に育った彼は、「ののさん、あん」（神仏へおじぎすること）という形式を教えられたほかには、宗教的なものを知らないで大きくなったのだが、しかし、それとは別に、幼時の彼には、誰にも芽生える宗教的感情の影のようなものがあった。彼の場合その感情は死と性慾とに結びついていた。六、七歳の彼にとって、空の星と幽霊と死と性的感覚とは、妙につながり合った一つのものであった。この場合性

的感覚というのは、現実の性慾とはまるで違った幼児的なものを意味することもちろんである。

そういう感情は昼間ではなくて、夜寝床の中の彼を訪れた。蒲団から首を出して眺める襖や障子の向こう側、屏風の蔭にはいつも物の怪が潜んでいた。幽霊の姿ではなくて、多くはお化けの種類に属するものであった。時には異様な動物であることもあった。彼はほとんど息を殺して、胸をドキドキさせながら、「きっとあすこにそいつがいるんだ。目を細くして笑っているんだ。もし障子の向こうへ一歩でも踏み出したら、きっとそいつが目に見えるに違いない」と、考えまいとすればするほど、そのものの怖さが加速度に大きくなって行った。

独りで寝ている時には、そういう恐怖と織りまざるようにして、もう一つの怖さはそれほどでないけれど、奥底の知れない恐れのようなものに襲われることがしばしばであった。後者には、しかし、恐れとともに何かしら甘い味わいが感じられた（彼は小学校へ入る前年まで祖母に添い寝をして貰い、皺くちゃの乳房に縋っていたはずであるから、この記憶はもしかしたら小学初年級頃から始まったものかもしれない。しかし、そうでないようにも考えられる。あるいは前に記したたびたびの病気の折り、昼間一人寝かされていた時の記憶かもしれない。また、夜明け方祖母が起きて行ってしまったあ

となどにも、そういう感情が来たのではないかと思う）。彼はそういう際の肉体的感覚を今でも思い出すことができる。それは寝ていて自分の腿の内側と内側とが触れ合う、擽ったいような、総毛立つような、そしてまたひどく懐かしいような感触であった。その感覚自体が何かしら空の星のごとく遥かなるものを象徴するかに感じられた。大人の言葉で表現すれば、「物自体」とか「意志」とかいうものに似ていた。それはプラトンの二頭馬車のように、無限の大空を天翔けるものであった。

少なくとも彼の経験では、少年時代の性慾はつねに死を連想したのであるが、この幼年時代の腿の感触も永遠なるものとともに死に結びついていた。そして、それはまた彼の幼児的厭世観につながっていたのである。

彼はその時何かしら遠い遠いもの、生命の彼方のものを感じた。その感情が同時に現実嫌悪となった。死ぬなんてなんでもない、むしろ楽しく願わしいことのように思われた。これらの幼児としてはかなり複雑な感情が、しかし大人のように色分けをしないで、ただ一つのフワフワとした雲のようなものとなって、あの腿の感覚に伴って、ほとんど一刹那に群がり湧いた。

こういう幼児の感情は、また同時に原始人類の感情ではないだろうか。人類は生まれながらにして文化人よりもむしろ

物自体　カント（ドイツ、一七二四―一八〇四）が説いた概念。本体と同義で、現象の対。現象の根源にあり、主観的に認識することはできないが、思惟することは可能とされる。

鋭く、現象の向こうに「物自体」を感じたのではないだろうか。原始人のうぶな心に直接ぶっつかって来た天体への限りなき恐怖と甘美なる思慕。それは、文化人の多くにはもはや幼年時代にだけしか感じられないものとなったのではないだろうか。

原始人類は汎神論者であり、偶像崇拝家である。それのミニチュアでもあるかのごとく幼年時代の彼もまた汎神的、偶像崇拝的であった。しかし、家庭だけが世界であった彼は、原始人のような適当の偶像を持たなかったし、それを製作する力もなかった。といって、仏壇の仏さまは大人の独占物であった。彼は神をみずから所有しないでは気がすまなかったのだ。彼の昼間の宗教は夜の寝床の中のそれに比べてひどく低俗であった。彼はもはや天翔けることをしないで、小机の中の紙包みに、現世の安心を求めた。

先にも記した通り、彼の祖父が老後の写経などの折り、身辺を離さなかった抽斗の多い桐の小机は、その頃はもう真っ黒になって、彼の持ち物となっていたが、小机の上部に小さな開き戸の部分があって、彼はその中を、一番大切なものを入れる場所、いわば神聖なる場所と心に定めていた。そして、彼の偶像である御神体は、その開き戸の中の最も奥まったところに安置せられたのである。

不思議なことに、彼はこの御神体が何であったかを思い出

すことができない。それが仏像や神像でなかったことは確かである。ともすれば、それは彼自身で何か絵のようなものを書いた紙片に過ぎなかったかもしれない。それを幾枚も白紙に包んで、その頃病気の折りなどによく頂かされた水天宮のお守りの包みのようなものにして、そこに安置し、これさえあれば大丈夫だ、この神様が守って下さるのだと、すっかり安心していたのである。ある場合には、それは一人の美しい少女を象徴する恋愛の護符であったこともあるが、それについては後に述べる機会があろう。

幼年の彼が、こういう御神体を必要としたことは異様に感じられるかもしれない。彼はそんな偶像に頼らなくても、もっと力強い保護者を持っていたではないか。父や母や祖母があったではないか。しかし、彼はそれらの家族にはことごとくを打ち開けて寄り縋れない気持ちがあった。家族の人々には、口でいえもしないし、いうのも恥ずかしいし、いったところでとても理解して貰えないような幻の国の感情があった。それを書くのは恐ろしいけれど、彼にはそんな幼年時代に、すでに父や母や祖母への妙な冷ややかさがあった。後に肉親嫌悪となるところの芽生えがあった。

6

彼はお婆さん子で、六つまでも、その乳をしゃぶっていたくらいだから、甘えん坊であったことはもちろんであるが、その甘えるということに、非常に強い羞恥と嫌悪を感じ始めたのは、小学校入学前後からその後の少年時代にかけてである。

彼は学校に入ってからも長いあいだ、家では名を呼ばれないで「ぼん」（坊やの意）と呼ばれていた。彼はこの「ぼん」という愛称がゾッとするほど嫌いであった。「ぼん」という発音のうちに、あらゆる意味をこめて彼そのものが象徴されていたからである。

彼の父は、お婆さん子の彼があまりにお人好しで、甘ちゃんで、しゃっきりしたところのないのを、歯痒がりもし、彼の将来のために気遣ってもいたようである。ごく幼時には、父のそういう感情が彼に向かって爆発することがしばしばあった。彼の側からはそれが敵意に近いもののようにさえ感じられた。立ち入った解釈をするならば、それは本当に父の潜在的敵意であったかもしれない。父と祖母とが、表面上はともかく、潜在的にはどこやら打ちとけぬところがあったことは前にも触れたが、その潜在的敵意が、祖母と同一体であるかのごとき彼に転嫁されたのであったかもしれない。四、五歳の頃、彼はよく父の平手打ちを喰らった。容赦のない平手打ちであった。そのうえ、父は彼を人けのない薄暗くて広い

部屋のテーブルの上にのせておいて、襖をしめきって、遠くの書斎へ帰ってしまうことがしばしばあった。むろん折檻のためである。そのつどどういう悪さをして折檻されたのかは少しも記憶がないけれど、それほど悪質のものであったとは考えられない。気弱でお人好しで正直ものの彼に悪質の悪さができるはずもなかった。父はただ癇癪を起こした場合が多いのだと思う。その頃父は紡績連合会事務所の閑暇の多い生活をしていた。

幼い彼は独りでとうてい降りることのできない冷たいテーブルの上で、遥か下に見える畳を覗いて、そのあまりの高さに震え上がり、シーンと静まりかえった薄暗い部屋の物凄さに、あらゆる物の怪を想像に描きながら、死ぬかとばかり泣き叫ぶのであった。母は父に遠慮をして彼を助けてはくれなかった。助けてくれるのは、いつも祖母であった。祖母は「おお可哀相に可哀相に」といいながら、彼をテーブルから抱きおろしたうえ、三度に一度は父に口小言を言いさえした。父はそれらの折檻を取り返すほど彼を愛撫することはなかったようである。もしそういう愛撫があったならば、彼はあのようにただ恐れはしなかったであろう。幼時の彼に取っては父は少しも親しみのない恐ろしいものに過ぎなかった。

これは彼のごく幼少のことであるが、六歳七歳と成長するにつれて、父は仕事が忙しくなり（その頃父は実業界に転身

し始めていた)、子供を愛撫する暇も折檻する暇もなくなって、彼とはほとんど他人になってしまった。もう恐ろしくはなかったけれど、親しむことはできなかった。彼は長いあいだ父を一つの嫌悪すべき体臭として感じていた。朝の洗面をするごとに、彼の手拭(てぬぐ)いの隣にかけてある父の手拭いからの男の体臭を嗅いで、それを感じていた(父は彼の真実の父であったから彼を愛しなかったはずはない。彼自身も後には父を尊敬した。これはただ幼時の感情のみを切り離してできる限り偽りなく記述したまでである。ある型の父親は、子供が青年時代を過ぎてからでなくては、本当に理解されない場合もあるのだ。これにはまたおそらく精神分析学のいわゆる「エディポス・コンプレクス」の意味が含まれているのであろうが、そのことは後に述べる機会がある)。

父は折檻をやめてからも、折りにふれては、「ぼんはあかん、ぼんはぼんやりものや」(坊やは駄目だ。ぼうっとしている)と世間の子供(それが町人の子供達なのである)と比べて、おっとりし過ぎていることを憂える言葉を吐いた。むろん愛するがゆえの心遣いであるが彼にはそうは響かなくて、「ぼん」と「ぼんやり」の対句(ついく)が、名状しがたい自己嫌悪の響きとなって、彼の心を蝕(むしば)んだ。

彼は叱られるばかりではなく、褒(ほ)められることもむろんあった。父や母も時々褒めたが、最もよく褒めるのは祖母であ

った。祖母には女らしく褒めておだてて育てる気持ちがあった。しかし、彼は小学校へ入る少し前から、褒められることをまったく喜ばぬばかりか、かえって不思議な嫌悪を感じるようになっていた。これが前に記した「甘えるということに、強い羞恥と嫌悪を感じ始めた」あの変化と一致するのである。

彼の父母や祖母は「何事も自分のことは自分でせよ。女中の手を煩わすな」という世間普通の教えを彼に教えていたが、小学校へ入ってからは、毎朝彼が自分の蒲団を自分でかたづけることもその一つであった。彼はわがままであったから、その教えを実践することはごくまれであったけれど、時たま気まぐれに蒲団をかたづけることもないではなかった。すると祖母は待ち構えていたように、「偉い、偉い、ぼんはほんまに偉いなあ」と繰り返し褒め上げるのをつねとしたが、彼はその褒め言葉を聞くと、悪寒といってもよいほどの、何かこう身体がねじられて来るような羞恥と嫌悪を感じたのである。蒲団をかたづけることは造作もないのだけれど、その褒め言葉を聞くのがいやさに、翌朝はわざと怠けてしまうほどであった。

そして、だんだん彼は家族のものの褒め言葉を恐れるようになったのだが、この身震いするような嫌悪は一体どこから来たのであろうか。わがままからの天邪鬼と考えるのは最も容易であるが、そういう一般的な解釈では何かしら言い尽く

せないものがあった。たとえわがままにもせよ、その原因がなければならなかった。彼は一体どうしてそれほどひねくれたのか。外目(そとめ)には「ぼんやり者」といわれるほど素直であった彼が、心の奥底ではどうしてそんな烈(はげ)しい自己嫌悪を感じはじめたのか、これこそやがて肉親嫌悪、同類憎悪に昂進(こうしん)する彼の異端性の源であったのだから、不注意に見逃すことはできない。前に父の折檻や彼の父への感情について記したのも、もしやそこに何かの秘密が伏在しているのではないかと疑ったからである。

故郷に夏ありき

五十六歳

1951・8・27

全文

初めて一人旅をしたのは小学三年生（明治三十六年、数え年十歳）の夏であった。名古屋から三重県津市の親戚へ、毎年夏休みの海水浴に出かける例でその年から一人で汽車に乗ったのである。まだ小さな汽車であった。三等車の横に長い腰かけには畳表が敷いてあった。走る窓から眺めると、遠くの山は動かず、手前の小山は少し動き、もっと手前の田や畑は、四角なうねを、たちまち菱形にくずしながら、すぐ目の下は縞になって恐ろしい早さで、うしろへうしろへと走って行く。私は多くの少年と同じに汽車が大好き、ことに一人旅の放浪味が楽しかった。駅弁もおいしかった。

津市の親戚は門長屋のついた士族屋敷で、塔世橋の近くにあった。私より二歳年上の従兄につれられて、そこから毎日贄崎の浜へ半里のたんぼ道を歩いた。炎天のたんぼ道には海の匂いが満ちていた。従兄は道の木の葉をもいで柴笛を吹いた。その烈しい音がひばりの声のように、青空にこだました。

贄崎の白い砂の遠浅の海はすでに海水浴場と名づけられていたけれど、田舎らしい淋しさで、ビーチ・パラソルも派手

初出　夕刊毎日新聞　八月二十七日号／昭和二十六年　毎日新聞社
底本　うつし世は夢／昭和六十二年九月　講談社

な海水着もまだないころであった。私は従兄に蛙泳ぎを教わった。あの地方には古くから観海流が勢力をもっていた。ある時は従兄の友達数名とボートで沖に出て、嵐にあい、どうしても海岸にもどれないという命がけの冒険もした。

海から疲れて帰って、親戚の家の五右衛門風呂に入るのも楽しかった。庭が広く、落ち葉を集めてたくのだが、その匂いが今も鼻に残っている。朝早く起きて庭に出ると、朝もやの中に、ゆうべの松葉の名残りの匂いが、すがすがしく漂っていた思い出も、郷愁の一つである。